

わんちゃん、ねこちゃんの健康について、獣医さんから専門的にお話しいたします!

わんにゃの健康最前線

「ねこの慢性腎臓病 ～水を飲む量が増えたと要注意!～」



京都中央動物病院
院長 獣医師
村田 裕史 先生

いつもと変わらないように元気で食欲もあるうちのねこ、でも、なんだか水をよく飲むようになったような気が……これはねこちゃんの腎臓に問題が生じているサインかもしれません。

はじめに

ねこちゃんがよく水を飲む。この症状のことを「多飲多尿」と表現します。ねこちゃんがこのような症状を呈する代表的なものに、慢性腎臓病（CKD）があります。この慢性腎臓病は、ねこちゃんの代表的な病気です。なんと死亡原因の第1位であるとの統計や3頭に1頭のねこちゃんがこの慢性腎臓病で亡くなっているとの統計もあり、非常に多い病気です。日々の診察室でもこの病気によく遭遇しますので、統計だけでなく自分の経験でも本当に多い病気です。

この慢性腎臓病の症状としては、水をよく飲む多飲多尿と言われる症状、体重減少、食欲不振、嘔吐や下痢などの消化器症状、元気がない、痩せてくる、歩き方がおかしいなどの歩行異常や姿勢の問題、痙攣などの神経症状があります。また、特殊な例ではありますが高血圧に関連して突然の失明などでその問題に気づく場合などもあり、非常に多様な症状を示します。

診断

この慢性腎臓病の診断のためにもっとも重要な検査としては血液検査および尿検査です。これを実施することにより、慢性腎臓病の診断だけでなく、ステージングができます。

この慢性腎臓病の診断や治療をおこなうために参考となる指標として、IRIS (International Renal Interest Society) のステージングが幅広く利用されており、これらのステージングを記載した表はインターネットでもpdfでダウンロードすることもできます。(表1)興味があればぜひ検索してみてください。ねこちゃんだけでなく、わんちゃんの慢性腎臓病ステージングもあります。この慢性腎臓病には表に示すようにステージ

あり、ステージ1から4にかけてだんだん進行する慢性進行性疾患です。このステージ分類に使用される指標が血液検査で測定されるクレアチニンです。このように重要なクレアチニンですがその解釈に、少し注意が必要な場面があります。クレアチニンは筋肉から出てくるので、慢性腎臓病が進行し、ねこちゃんが食欲不振や消化器症状により痩せてくと筋肉量も減少。このため、クレアチニンは低下してきます。ですので、ステージが進行し、末期の腎臓病になると、クレアチニン値が下がる場合もしばしば見受けられます。これは筋肉減少による見せかけのクレアチニン値の減少です。このような勘違いは血液検査だけを眺めていると獣医師であつてもうっかりとしてしまうことがあります。つまり、ねこちゃんの体をしっかりと確認することがやはり大切で、身体検査や問診を十分に行う必要があるということです。

クレアチニン以外にも慢性腎臓病で変動する血液検査項目として、BUNがあります。BUNも慢性腎臓病の進行に伴って上昇します。BUNが上昇した状態を高窒素血症といいます。このようにBUNも慢性腎臓病においては非常に有用性が高いのですが、解釈に注意が必要な点があります。それは食事による影響です。BUNはタンパク摂取により増加しますので、食事や下痢などによる消化管内での出血などに影響され、変動するのです。さらにクレアチニンも同様ですが、末期のステージになると食欲不振や消化器症状により食事が摂取できなくなることも注意してください。慢性腎臓病は進行していますが、BUNは低下してくるから、これは慢性腎臓病が治癒しているわけではなく、十分に気をつける必要があります。



などの使用も非常に効果があります。このチューブの素晴らしい点は、水分補給が簡単にできると、流動食などを使用し、食事がとれること、投薬が簡単になることです。直接的な慢性腎臓病の治療ではないですが、このチューブ留置は検討の価値があるねこちゃんの慢性腎臓病の選択肢です。ただし、デメリットもあります。留置には全身麻酔が必要な点が最大のデメリットです。

予後

慢性腎臓病のねこちゃんの平均的な予後は2年半との報告があります。しかし、これは慢性腎臓病の1〜4ステージを含む数字です。当然ですが初期ステージであれば残された時間は長く、末期ステージであれば残された時間は短くなります。末期ステージであれば平均的な予後は3ヶ月との報告もあるため、いかに早期にねこちゃんの慢性腎臓病（CKD）を診断し、この腎臓病ステージを進行させない対策（治療）を実施していくことが大切です。

終わりに

ねこちゃんの慢性腎臓病は本当に一般的な病気です。一度、動物病院で健康診断として、血液検査と尿検査を受けてみることをご検討ください。

また、診断の最初にも書きましたが、慢性腎臓病を考えると、尿検査が非常に大切です。なぜなら、腎臓は尿をつくる臓器であり、腎機能が低下する慢性腎臓病では、尿検査もまた変動するためです。尿検査で重要なポイントは、2つあります。ひとつ目は尿比重です。慢性腎臓病では尿比重が低下します。尿比重低下は尿の濃縮ができていないことを意味し、尿量が増加します。そのため、慢性腎臓病が進行すると、尿量が増加し、水をよく飲む多飲多尿が発現するのです。また、ふたつ目は尿タンパククレアチニン比（UPPC）です。尿比重と同様に、これを尿検査で確認することが、慢性腎臓病の診断と治療戦略においては重要です。

また、血液検査や尿検査だけでなく画像診断も考慮します。なぜなら、ねこちゃんには尿石症も多く、尿道閉塞であれば閉塞を解除するなどの治療により、迅速に高窒素血症を改善できることになりやすくなります。また、尿検査において、膀胱炎などが存在すると尿タンパククレアチニン比（UPC）が上昇するため、しっかりと膀胱や腎臓の状況を画像診断で確認することが望ましいでしょう。

また最近のトピックとして、SDMAは腎臓病の早期診断に有用であるとの情報があります。クレアチニンやBUNが上昇していた場合、慢性腎臓病の初期ステージでは確認のためこのSDMAを測定する場合があります。

治療

このねこのCKDに対して様々な治療がありますが、大きく4つに治療ツールを分けて考えていきます。ひとつ目は食事療法です。この食事療法は低リン食で低タンパク食であるのが原則。しかし、難しいところは末期では食欲不振や消化器症状でなかなか療法食を食べてくれないところ

〈お問い合わせ〉
京都中央動物病院 電話 075-821-1020 京都市下京区柿本町582-3 9:00~20:00